

学生のボランティア活動を支援

ボランティアセンターの取り組み

学外の団体や企業からのボランティア依頼を取りまとめ、学生とのマッチングを行ってきたボランティアセンター。3年目を迎えるにあたり、現在の活動や今後の取り組みについて、センター長に話を伺いました。

人間力を鍛える ボランティア

学生には、知識や資格の取得はもとより、学外の活動にも積極的に参加して、さまざまな経験を積んでほしいと考えています。本学では特にボランティア活動への参加を強く勧めています。

昨年度設立したボランティアセンターは、地域からのボランティア情報を収集し、審査して、HPなどで紹介・斡旋しています。また、ボランティア教育や指導の役割も担っています。

ボランティアは、厚意だからという理由で好きなことややりたいことだけやればいい、というものではありません。責任ある活動のためにも、気持ちや熱意だけでなく、活動に関わる知識やスキルは身につけるべきですし、受け手への配慮や仲間との協調など、社会に関わる一員としての役割は果たさなければいけません。それらが、ボランティア活動を通じて学生たちに身につけてほしいと思っている「人間力」であり、本学の教育が目指すところです。

来年度は、ボランティアとは何か、どう取り組むべきかなど、ボランティアに関する講義を授業の中に取り入れる計画です。

多くの学生が参加した 土砂災害の被災地支援

ボランティアセンターには年間200件のボランティア依頼が届きます。多種多様なボランティア活動に参加し、成長する多くの学生の姿を目にしています。

広島市の土砂災害では、東広島市社会福祉協議会と連携しながら被災地支援を行いました。情報を一元化し、必要な場所に必要な学生ボランティアを派遣。土砂の掻き出しや搬出作業に従事



しました。学生の移送には、通学やキャンパス間の移動に使っているバスを利用。大型バスは現地に入れなため、マイクロバスが使えるよう調整しました。ボランティア派遣は9日間、のべ151人の学生・教職員が参加しましたが、個人で社会協議会などに申し込んだ学生も多くいて、ボランティアの心が芽生えてきていると感じています。

学生の自主的な活動を 応援したい

学生と話をしていると、「地域で、こんなことができたらしらると思うんです」などといったセリフが出てくることがあります。実現のための手段が分からなくて、心の中に留めているのです。そういった小さな芽を丁寧に育てていきたいと思っています。1人では実現させるのが難しいことでも、ボランティアセンターに来てもらえば、ほかの学生への呼びかけで仲間を増やせまし、情報や関係団体の紹介など、いろいろな形でサポートします。募集されたボランティア活動に行くことも勉強になりますが、活動そのものを自ら生み出すことはとても大きな成長の機会にな

ります。まずはボランティアセンターに来て、やりたいことのイメージや思いを聞かせてほしいと思っています。

最後に。大きなボランティアも重要ですが、身近な人を手助けすることもボランティアです。生活の中にボランティアの精神を取り入れてほしいと思っています。



ボランティアセンター長
吉川 眞 教授
(医療福祉学部 学部長)

2014東広島学生ボランティア研修・交流会

2014年11月29日(土) 広島国際大学東広島キャンパスにて

被災地支援の体験から ボランティアを考える

東広島市社会福祉協議会との共催で、学生をはじめ一般の人も参加できるボランティアの研修・交流会を開催しました。今回は、広島県の土砂災害復興支援について、さまざまな立場からの報告・発表の後、「地域のボランティア活動と災害への備え」をテーマにしたグループワークを実施。各々が防災・減災や、共助などについて深く考えるきっかけになりました。



学生の被災地支援活動や 義援金で復旧を後押し



活動が把握しやすいようにビブスを着用して支援にあたる



2014東広島学生ボランティア研修・交流会で活動報告する
松本さん(左)と川本さん(右)

被災地での活動は防災意識と ボランティア意識を変えました

本学では、広島県の土砂災害の復興支援として、ボランティアの学生および教職員を募り現地へ派遣しました。初めてのボランティア活動だったという川本依里さん(保健医療学部医療技術学科救急救命学専攻1年)と松本華穂さん(同)は、同じ県民として何かの役に立ちたいという思いと、救急救命士を目指す者として被災地を自分の目で見たいという思いで、ボランティアに参加しました。道路や民家の土砂の撤去は、女性にとっては特に体力的に厳しい活動ですが、9回の計画のうち5回に参加。松本さんは、「回数を重ねるごとに余裕が出て、細部に目が届くようになり、やるべきことが見えてきました。いろいろなところからたくさんの人がやってきて、オペレーションやシステムづくりなどの重要さも感じられた貴重な経験になりました」と体験を振り返りました。テレビでは放送されていない災害現場を見て、ニュースだけでは分からない現実に触れたことは、防災意識やボランティア意識を変えたと言います。川本さんは「現地に行き初めて分かることがたくさんありました。目で見て、体で感じることの大切さを実感しています。今後は『自分で体験する』ということ意識して、ほかのボランティアにも参加したいと思いました」と今後への意欲を話してくれました。